

謡曲における禪語の二三について

佐
竹
大
鑑

謡曲の歴史は随分古く、或人は神代の神楽にその源を発しているという人もあるし、また奈良時代に輸入された唐の散楽に、古来の滑稽な戯技が加わって総合されたものがその起源だという人もある。古くは猿楽と称せられていた。それが、平安、鎌倉を経て、足利時代に入り、足利義満がこの猿楽を非常に愛好したことで、またちょうどこの時代に、観阿弥・世阿弥という父子の二大天才が出て、この芸能を大成したといわれている。

謡曲の内容は多種多様であるが、これをその内容から神事物、これはいうまでもなく神社の縁起等を主として、祝言の意を表わしたものが、次が修羅物で、戦争で亡くなった亡霊が旅僧の回向の受けて成仏するというのである。

田村、敦盛、忠度等がある。次が鬘物で、これは女性が主人公で、伊勢物語、源氏物語等に出て女性の恋の妄執が取りあつかわれている。その他に現在物、尾能等がある。

謡曲と仏教思想とは随分関係が深い。大体の筋書は、諸国一見の僧が出て来る。そして、戦場か、何か有名な土地へ行く、そこに必ず亡霊が出て物語りをする。そして、その僧の法話か説経によって、成仏するというのがその一般の筋書である。

ところが、その僧の法話、説経は大体浄土思想のようであるが、しかし、簡単にそうばかりとも言えない。仏教々理を表現した言葉が多いようである。一二の例を挙げてみると「悪といふも善なり煩惱といふも菩提なり」卒都婆小町「一切衆生悉有仏性如来」白髭「有情非情皆具成仏道」鶉「草木国土悉皆仏心」朝顔「自性真如」御裳瀧「色即是空」朝顔、山姥「南無三宝」邯鄲「南無帰依仏」龍田「万法一如」東岸居士「法身説法の妙文」杜若等挙げればいとまがない程である。

しかし、私が言おうとするのは、特に禅的なものと限定されたものである。

禅的なものは、その何れに亘っても見られるのであるが、始めに先づ部分的に禅的なもののあるものを取り挙げ、終りに、全体が禅的なものを取扱っているものに論及したいと思う。順序は勿論不同である。

謡曲中に、小町を取扱ったものが、通小町、草子洗小町、関寺小町、鸚鵡小町と、これから取り挙げようとする卒都婆小町とがある。

天下の美人であり、六歌仙の一人であった小野の小町も、年老いて世人から見捨てられ、乞食の身となって世に物乞いをして歩いている。「あまりに苦しい候ふほどに、これは朽木に腰をかけて休まばやと思ひ候」と小町が道端の朽木に腰をかける。ところがそれが、古くなった卒都婆なので、ワキである高野の僧と問答が始まる。ここでは、シテが小町、ワキが高野の僧、ワキツレが高野の伴僧である。

ツレ「悪というも。シテ「善なり。ワキ「煩惱といふも、シテ「菩提なり。ツレ「菩提もと、シテ「植木にあらず。ワキ「明鏡また、シテ「台になし。地「げに本来一物なき時は、仏も衆生も隔なし。

ここでまず禅家として問題にしなくてはならないのは、「煩惱即菩提」という思想と、菩提もと植木にあらず、明鏡また台になし。」という語とである。

「煩惱即菩提」という語は、もともと仏教の根本思想であって、禅家の専門語ではないけれども、今日では恰も禅家特有の語のように解せられ禅家に於いて専門語のように使用している。煩惱と菩提とは、凡夫は恰も正反對の

ものの、ように思っているが、仏教の奥地に入れば、煩惱も菩提も差別相違はなく、すべて同体不二であり、一如平等、不二一体である。というのである。有無を絶し、宇宙すべては平等一体無差別という禅の教理と、合致しているところから、煩惱即菩提が、恰も禅の専売特許のように使用されるようになったのであろう。

大乘莊嚴經論第六隨修品に、「法性を離れて外に別に諸法あることなきに由り、是の故に是の如く説く、煩惱即菩提なりと、」又智顛の四教義第六に、「若し煩惱即菩提なるを知らば是れを無作の道諦となす。」とあり、また、六祖壇經に、「善知識、凡夫即仏、煩惱即菩提、前念迷へば凡夫、後念悟れば仏、前念境に著すれば即ち煩惱、後念境を離れば即ち菩提」とある。これを考えると、放下著を称する禅家の境地と相似しているので前述のように禅家の特有語のようになったのであろう。これと同内容の語に「生死即涅槃」の語があるが、繁雜なので省略しておく。次の「菩提もと植木にあらず、明鏡また台になし。」の語であるが、これは少くとも禅を口にする程の者は誰しもよく知っている六祖壇經中の、惠能禅師の語である。菩提もと植物にあらず、などと読む。その読み方がいかにも素人くさくて気になるが、六祖壇經を見て、本当の意味を知らず読んだのかもしれない。

六祖壇經によると、黄梅山の五祖大満弘忍禅師が、自分の法を継承するものを定めんとして、我と思わん者は見所を歩廊の壁に張り出せと命じた。自他共に許していた神秀が、

身是菩提樹 心如明鏡台。

時時勤拭拭 勿使惹塵埃。

他の雲納共は、この偈を見てその立派なのにびっくりして、これは神秀に相違ないと思い、神秀も弘忍が、この

偈を見て自分に法を伝えることを許して呉れると思っていた。ところが、夜弘忍は神秀を自分の部屋に呼んで、

汝作此偈未見本性。只到門外未入門内」と云った。

時に惠能は黄梅山に来てから八カ月、碓房で白踏みばかりしていた。また惠能は無学で一字の文字も知らぬ、そこで江州の別駕というものに、自分の見所の偈を書いて貰った。それが

菩提本無樹 明鏡亦非台

本来無一物 何処惹塵埃

である。いうまでもなく法は惠能に継がれ惠能が六祖となったことは余りにも有名である。さて、謡曲の語はこの惠能の偈の初め十文字を書き下し文式に読んだのである。

そうすると、鎌倉時代にはすでにこの話が日本に伝って、謡曲等にも取り入れられていたのと思われる。

また、この偈に用いられている「本来無一物」の語は禅家の語として常に用いられる語であるが、これも謡曲中に用いられている。

これも、卒塔婆小町の中に、前述の語につづいて、「げに本来一物なき時は、仏も衆生も隔なし。」とある。

万法真如の実相は、吾人の思慮分別、是非善悪、差別観を以って見るべきものでなく、執著すべき何物もないという意味である、これこそ禅家の本領で、この宇宙に立脚して諸法を觀じてこそ禅宗の真面目が得られるのである。

「本来無一物」の語は禅家ではよく言うが、色々と参考書を繕ってみても、六祖壇經の惠禅師のこの偈が引用しあるので、或は惠能禅師のこの偈が最初かもしれぬ。

「寒山詩」を繕いて見ると、

本来無一物。亦無塵可_レ_レ私。若能了_レ達此不用_レ坐兀兀。

全く寒山の境地は、惠能禪師の境地と同様で、また払う可き塵もないというのである。

この真底に達するというと、何も兀兀と坐禅をする必要も、平常心是道である。日々是好日である。この境地こそ禪家の平常底でなくてはならない。

碧巖録の、紫陽山方回万里の序文には、

四十二章經入_レ中国始知有_レ仏。自_レ達磨至_レ六祖伝衣。始有_レ言句曰_レ本来無一物為_レ南宗。曰_レ時々勤私拭為_レ北宗とある。本来無一物の語は、前述のように六祖に至って始めて作り出されたといっている。

本来無一物の意義は、宇宙の森羅万象の現象は、これ皆因縁生のものにて物それ自体という自性は本来存在しないものである。諸法の実相は皆空であって、有無得失を離れて、執すべき何物もない。有ると見るは妄想であって本来空であるといふのである。

「谷行」という謡曲がある。これは、師の阿闍梨というものの弟子に、松若という少年がいる。師匠の阿闍梨の大峰入に無理に随行を願ひ、慈母に別れて峯入を強行したが山中で少年は病気になる。峯入の山中で病気になる、谷行(たにこう)といつて谷の中にその病人を投げ入れて殺すという大法がある。そこで可哀相だが少年を谷行に処する。しかし先達、随行、山伏が開山役の優婆塞、不動明王、山神護法神にお祈りをして、再び少年を蘇生さすという筋書である。少年を谷行にしようとする際、一同が非常にかなしむところにある言葉に

一切の有為の世の習ひ、如夢幻泡影如露亦如電、応作如是觀の心をも、思ひ知らずやさしも此、行者の道に出でながら、火宅の門を去りやらで、猶安からぬ三界の、親子恩愛の、歎きにひとしかりけり。とある。

これは、禪家では大切な經文である金剛經の「応化非真分」第三十二ある偈と全く同じである。

一切有為法、如夢幻泡影

如露亦如電、応作如是觀

金剛經は、我等が読誦するのは鳩摩羅什の訳で、三十二品に分れ、一切諸法皆空の理を根本としたものである。

「若以色見我、以音声求我、是人行邪道、不能見如来」の偈と共に禪宗の真髓を表わしている偈であるが、前述の「一切有為法……」の偈は謡曲中に見られるが、この「若以色見我……」の偈は謡曲中に見当らない。

因に、なぜこの金剛經を禪家で大切にするかは、六祖壇經中に、「惠能却出門外見一客誦經（側注、金剛經）惠能一聞經語（側註、応無所住而生其心）心即開悟、遂問客誦何經客曰、金剛經」とある。この金剛經は、黄梅山の弘忍大師が門人一千有余人に常に勸持せしめて常に大切にしておられる、と説明したので六祖は黄梅山に赴いて五祖に法を受けたのである。そんな所からこの金剛經は禪家の最も大切にされる經文となったのであろう。

即身成仏、即心即仏

即身成仏は、謡曲「身延」の中にある語で、これはいうまでもなく日蓮上人が開いた身延山のことを取扱ったも

ので、上人は龜山天皇文永十一年に甲斐の西谷の田代という所に草庵を結んで住んでいたが、弘安四年、別に一堂を建立して此山を身延山久遠寺と号した。上人が法華經を誦誦すると、山の草木の精が表われて、その御法をきき感謝することを述べたものであるが、その中に、

実にや恩愛々執の涙は、四大海より深し、聞法隨喜の其の為には、一滴も落すことなし、有難や衆罪如霜露恵日の光りに、消えて即身成仏たり。

とある。また、「安宅」に

さて又八目の草鞋は、八葉の蓮華を踏へたり、出で入る息にあうんの二字を称へ、即心即仏の山伏を、こゝにて討ちとめ給はんこと、明王の照覧はかりかたう……………

とある。安宅の筋書は余りに有名なので省略するが、即身成仏、も即心即仏というも、同様に、心仏一体で差別のない意に用いられているのでここでは一緒に出した。この即心即仏の語が、何時の時代、誰によって首唱されたかという事は明白ではないか、華嚴經の中に、「心仏及衆生、是三無差別」の語から出たものらしいといわれている、梁時代の宝誌公の「大乘讚」には、

不解即心即仏、真似騎驢覓驢

とあり、又傳大士の「心王銘」には、

了本識心、識心見仏、是心是仏、是仏是心、念々仏心、仏心念仏、乃至、自觀自心、知仏在內、不向外尋、即心即仏、即仏即心

等がある。

また景德伝灯録、並びに無門関には、

馬祖因大梅問、如何是仏、祖云即心是仏、馬祖因僧問、如何是仏、非心非仏。

とある。即心即仏というも、非心非仏というも、別理でもなく肯定でも否定でもない。同一の境涯であつて、真心の表現なのである。心外無別法なのである。一切の諸仏、一切の菩薩は皆是の心中にあるのである。諸仏を心外に求めてはならないのである。直指人心見性成佛なのである。これが禪家の本領である。この語を馬祖禪師が唱えられてより、此一句は禪家の真骨髄として、大いに用いられたようである。断際禪師の「伝心法要」には、

即心是仏、無心是道、但心を生じ念を動ずる有無長短、彼我能所等の心なければ、心本是れ仏、本是れ心なり。

とある。その他「正法眼蔵」とか多くの禅語録中にはこの句が多く見られる。一二を例示してみる。読み易くするため書き下し文とする、

「六祖壇経」坤の巻に、

僧法海は韶州曲江の人なり、初め祖師に参じて問ふて曰く、即心即仏、願くば指論を垂れ玉へ、師曰く、前念不生なれば即ち心。後念不滅なれば即ち仏、一切の相を成す。即心一切の相を離る。即仏吾若し具に説けば窮劫にも尽きず、吾が偈を聴け

即心名恵 即仏乃定 定恵等々 意中清浄 悟此法門 由汝習生 用本無生 雙修是正

法海言下に大悟す、偈を以って讚して曰く

即心元是仏 不悟而自屈

我知定恵因 雙修離諸物

また道樹縁に

南泉願禪師、衆に示して曰く、江西の馬祖即心即仏と説く、又曰く非心非仏と、王老師は不恧麼不是心不是仏不是物恧麼に道ふ。還つて過ありや、時に趙州出でて礼拝し了つて去る。続いて僧あり、州に問ふて曰く、上座礼拝し了つて去る。意作麼生。師曰く、他却つて老僧が意旨を領し得たり。

且過

これは諸国歴遊の雲水が、寺院に來つて一夜の宿を乞う時、これを宿泊させることを且過という、即ち、夕べに來り、且に過ぎ去るといふ言葉から來たものである。且過寮とはその寮舎のことである。

謡曲の木賊にはその語がある。

謡曲の「木賊」は、信濃の山奥に木賊を刈つて世を渡る老翁が、かねて愛子が行方も知らぬ人にさそわれて行方不明で、時々心が狂い気が乱れつつ愛子を尋ねていたが、年を経てうれしく巡り逢うたことと、園原や伏屋に生ふる葦木のありとは見えて逢はぬ君かな、の新古今集にある和歌とを一つ話にした作りものである。

さて、この「且過」といふ語は、旅僧が老翁の家に一夜の宿を得るところである。

いかに御僧たちに申し候、我らが私宅は且過にて候、一夜を明して御通り候へ。

「禪苑清規龜鏡文」に、「且過寮は三朝権りに住す、礼をつくして供承せよ。」とある。

次に、全篇を通じて最も禪的のものが多いのは「放下僧」である。この筋書は、下野の国の住人牧野左衛門何某というものに、小次郎とその兄との二人の子がある。牧野左衛門何某は、相模国の住人利根の信俊というものに殺された、そこで二人の兄弟が仇討ちをするのである。二人は放下（田楽法師の類で、歌舞軽業手品などを営業するもの）に身を化し、また兄は僧侶になっていたので僧形の放下に身をやすし、二人で無事に仇討ちをするというのが大略であるが、その中には、沢山の禪語が出て来て、禪宗の専門の僧侶の作とも思える、作者は禪竹ということになっている。

禪竹は、人名辞書によると、金春流猿楽の祖で、大和の人、金春氏清の養子となり、世々春日の社人で、秦河勝四十四世の孫である。武田里にいたので、武田式部とっていたが、弥三郎と改め、後七郎と称し、禪竹と号した。幼より技芸拔群で、幕旨を承けて散楽六十六曲を作り、之を禁裡、及び春日社で奏してから、新曲が日に行われた。応仁の乱に関白兼良に従って南都に赴き、家領を失い、大和・伊勢等に移住したけれども、春日の祭祀には必ず仕えたといわれている。応永八年八十六で没した。

この伝記によると、禪竹が特に誰について参禅したということを伝えていないが、誰かについて参禅するか、かなり禪書を読んだものでなくては書けない程多くの禪語を使用している。

さてそのような研究はここで割愛するとして、放下僧の、禪的要素の多い部分を抜書して研究してみたい。この中には初めの方に、「会下」とか「行脚」とかの禪語が出て来るが、これらはもう説明の必要もないので省略する。

夫れ団扇と申すは、動く時には清風をなし、静かなる時には明月を見す。明月清風唯動靜の内であれば、諸法を心が所作として、心実修行の便りにて、我等が持つは道理なり。(中略)夫れ弓と申すは本末に、烏兔の姿を像り、日月をこゝに頭はし、淨穢不二の秘法を表す。

さて放下僧はいづれの祖師禪法を御伝へ候ふぞ、面々の宗体が承りたく候、我等が宗体と申すは、教外別伝にして、言ふも云はれず、説くも説かれず、言句に出だせば教に落ち、文字を立つれば宗体に背く、ただ一葉の飄る、風の行方を御覧ぜよ、げにげに面白う候、さて座禪の公案何と心得候ふべき。入っては幽玄の底に動じ、出でては三昧の門に遊ぶ、自身自仏はさていかに、白雲深き所金竜躍る。(中略)さて向上の一路は如何に、切つて三段と為す、暫く切つて三段と為すとは、禪法の言葉なるを、中略、されば大小の根機を嫌はず、持戒破戒を撰ばず、有無の二偏に落つる事なく、皆成仏するためしあり、かるが故に草木も発心の姿を頭はし、柳は緑花は紅なる、その色々を頭はせり、中略、浦の湊の釣舟は、魚を得て笠を捨つ、皆是れ三界唯心の、ことわりなりと思しめし、心を悟り給へや。

以上の中に禪語の多いことが知られるが、いまできる限りその出典をしらべてみると、

諸法を心が所作として、

大施食經の冒頭に「若人欲了知、三世一切仏、応觀法界性、一切唯心造」とある。禪宗では施餓文として常に誦する所である、「人若し三世一切の仏を了知せんと欲せば、応に法界性一切は唯心の造る所と觀すべし。」である、宇宙一切は唯心の所造である。というのである。

禪宗では「三界唯一心、心外無別法、心仏衆生、是三無差別」という、この偈は、「八十華嚴」の十地品の「三界所有、唯是一心」の偈と、「六十華嚴」の夜摩天宮菩薩説偈品の「心仏及衆生、是三無差別」の偈とを合わせて作ったものといわれている。要するに吾人の心識を離れて他に諸法あることなく、諸仏もあることなく、「心外無別法」なのである。これこそ禪家の活綱領で、座禅もこの本心を見極めんための努力なのである。「六祖壇經」には、此三身仏(法報応)は、自性より生ず。外よりは得ず。何をか清淨法身仏と稱す。世人の性本清淨にして万心自性より生ず。」とある、また「大覚禪師坐禪論」には、自心と仏、万法の關係が実に論理的に判り易く書いてあるので、少し長いが引用してみよう。

問ふて曰く、禪法は無相、無念、靈徳露はれず、見性また証なし、何を以て之を信すべき。答へて曰く、自心と仏心と一味豈に靈徳にあらずや、我心我知らずんば何を喚んでか証拠となさん。即心即仏の外何の証拠をか求めん。問ふて曰く、能く一心の法を修すると、また万行万善を修すると、功德いかでか之に比すべき、答へて曰く、頓に如来禪を覺了すれば、六度万行体中円かなり。然る時は、禪一法一切の諸法を備へり。豈にい

ふ事を見ずや、三界唯心、心外無別法なり。たとえ万行を修するとも心法を知らずんば、悟りを得ることを得べからず。若し悟らずして成仏すといふは、あにその理あらんや。」

と述べている。

臨濟録には、

問如何是真仏、真仏、眞法、乞垂開示。師云、仏者心清淨是、法者心光明是、道者処々無礙淨光是。三即一、皆是空名而無実有。如眞正作道人、念々心、不間斷、自達磨大師。從西土來、祇是鏡箇不受人惑底人。

……………」

といひ、「若人求仏是人失仏。若人求道人失道、若求祖 是人失祖。」といっている。

即ち自心以外に仏もなく、道もなく、祖もないのである。自心以外に何物を求めるか、自心以外にあらゆるものを求めても何物も得られないのである。

「寒山詩」に、

説食終不飽、説衣不免寒。飽喫須是飯。著衣方免寒。不解審思量。祇道求仏難。廻心是仏。莫向外頭求。

寒山も、心を廻せば是仏、外頭に向って求むるなかれといっている。

教外別伝

これは、教外別伝、不立文字と十字が一偈となるもので、読んで字の通り、言教の文字によらずして、別に心を以って心に伝えられたということで、勿論禪宗の宗旨をいうものである。

これは、聯灯会要第一に、「世尊、靈山会上に在りて、花を拈じて衆に示す。衆皆黙然たり。唯迦葉のみ破顔微笑す。世尊云はく、吾れに正法眼藏涅槃妙心実相無相微妙の法門あり。文字を立てず、教の外に伝へて摩訶迦葉に付嘱す」と言えるものである。禪家ではこの釈迦直伝の以心伝心を以って我が法門の世尊より迦葉へ、迦葉より阿難陀……菩提達磨……そして現代の各師家へと、一器の水を一器に移す如く、脈々相伝えて絶ゆることないといっている。景德伝灯録序には、「正眼流通の道は、教外別伝不思議なるものあり」と言い、前述の聯灯会要と同様の文が無門関の第六則に出ている。葛藤集下にも出ているが文が少し違っている。

世尊在靈山会上一拈華示象。此時人天百万悉皆罔措独有金色頭陀一破顔微笑。世尊言吾有正法眼藏涅槃妙心実相無相微妙法門不立文字教外別伝付嘱大迦葉一

とある。

六祖壇經、南海宗宝の跋には、「或曰、達磨不立文字、直指人心見性成仏」とある。これは達磨が摩訶迦葉と同様、不立文字の法文を心に受け、それを実行していることを立証していること言っているのである。この話頭は禪家としては大切なので、五灯会元、第一、禪宗正脈第一、祖庭事苑第一等にも皆前述と同様な文が出ている。

言句に出せば教に落ち、文字を立てれば宗体に背く。

文字を立てれば宗体に背く、は前述の様に禪宗の本領は不立文字であるから、文字を立てると禪家の宗旨に背く

というのである。言句に出せば教に落つ、禪家では、釈迦が大悟徹底されたその時の心印を伝えるのであって、自証の心印は文字言語では説明解釈することが出来ない。冷暖自知であつて、その境涯に自分自身が入るより他方法はない。即ち直指人心見性成仏である。故に、八万四千の法門も、釈迦は一字不説といふのである。それを説けば教相に落ちるといふのである。一字不説、言句を絶して以心伝心、これが禪家の真面目である。

大乘起信論に「言説の相を離れ、名字の相を離れ、心縁の相を離る」とある。諸仏の自証せる實際の境界は、そのまま諸仏の実証で、それは如何に巧妙に文字で言語で表現したとしても、到底その真底は表現することができずかりでなく、むしろその真実から離れて行くばかりである。月は真如、指は月を指す材料、文字はその指である。指にいつまでもつきまとうていては、月を見ることができないのと同様、文字につきまとうていては、真如の月、心をつかむことができない。

碧巖録の第十四則、雲門對一説の評唱に

禪家流、欲知仏性義。當觀時節因緣、謂之教外別伝、单伝心印、直指人心、見性成仏。

淨穢不二の秘法を表す

禪は有無を絶し、対立を超越し、融合一体、淨穢不二の世界こそ禪の境界である。とに角、一体となる。これが判らなくては、またできなくては禪を体得したとは言えない。小我も大我も、宇宙も自分も、そんなものは超越して、一体不二となる。これぞ禪家のめざす所であり、これが禪哲学の根本である。

柳は緑花は紅

何かと言えば禅家ではこの句を口に出す。これは言うまでもなく、柳は緑花は紅なのは、これが宇宙の真面目で、当体それ自身が法身であり、仏の説法なのである。

禅林類聚経教章に、「海印云見不及処、江山滿目、不覩纖毫、花紅柳緑、白雲出沒無本心。江海滔滔豈盈縮。」とある。又蘇軾の詩に「柳緑花紅真面目」とある。皆宇宙自然そのままが仏の当体であり、仏説法なのである。それを見てこそ眞の禅家と称することができる。蘇東坡居士投機の偈に、「谿声便是広長舌、山色豈非清浄身、夜来八万四千偈、他日如何举似人」とあるが、この溪声広長舌も、柳緑花紅も皆同境界で、森羅万象皆これ仏の露現でないものはない。

鳥のカアも、雀のチュウも皆これ仏の表われであり、仏の説法である。眞に釈迦の大悟の心を心として禅定に入れば、この教理を体得しうることができるのである。これこそ説明ではなく人々が実参しなくてはならない所で、釈迦の一字不説もこの精神から判るところである。

白雲深き所金竜躍る

禅林句集には「白雲深処金竜躍、碧波心裏五兔驚。」とあり、解として、

金竜は日、玉兔は月なり。とあり、また今井福山氏の「禅語字彙」には、奥深く威厳ありて、計り知るを得ざる

意、金竜は日をいふ也。とあり槐安國語の二に出ているとしてある。

さて以上、禪的なもの、禪語と思われるもの、を数種挙げたのであるが、大体謡曲は、その源を随分古い時代に発しているが、純然たる謡曲としては、鎌倉時代になって成立したものである。

特に足利義満によって愛好され、また支援されたことによって非常に発達し、伝播したのであった。足利氏が臨濟禪を信仰し、その発達に力を用いていたことを知れば、謡曲の中に禪思想が多分に盛りこまれている事は当然すぎるほど当然の事である。

しかし、謡曲の中には、禪思想以外の仏教思想、日蓮宗思想、浄土思想、また本地垂迹思想の含まれたものも多数ある。これは、平安朝末期から鎌倉時代にかけて、日本に於いてはこれらの新興仏教思想が勃興し、多くの民衆の中へ浸透して行った結、謡曲の中にもこの思想が表われている事は当然である。

鎌倉時代の武士階級を基本として、禪文化が、日本一般民衆の生活の中に溶け込んで行ったことは、多分誰かが論ぜられる所であろうと思うが、謡曲中に用いられている禪語を一々引示して、それが、民衆の日常生活の中に、禪語としてではなく、民衆語として用いられているものを抜書してみれば、如何に禪宗が民衆の中へも、生活として溶け込んでいたが判るのではないかと思う。

謡曲は、演技である。演ずる人と、鑑賞する人との両者があって始めて成立するものである。故に、演者の言葉は出来る限り鑑賞者側に理解されなくてはならない。その点に於いて、「放下僧」の如きは、随分六かしい、禪宗の専門要語なり、禪思想を表現する言葉が多分に用いられている。

しかし、これがもし、全然理解されないものならば、或は生命を持ち続けていなかったかもしれない。それが生命を持っているという事は、鑑賞者の中にはずい分禅思想の判る人がいたに相違ない。